

Interview

Max Ionata

マックス・イオナータ

2009年7月に、初のリーダー作となる『インスピレーション』をリリースするや、瞬間に注目のプレイヤーとして話題となったイタリア出身のサクソフーン奏者、マックス・イオナータ。彼がこの9月に急遽来日し、各所でイベントを行なった。しかし、話が急ただけに見逃したファンも多かったはず。ここでは、彼のインタビューと、来日ライブの様子をレポートしよう。

取材：菅野聖
撮影：松村秀雄
協力：アルポーレ・ジャズ

イアを受けて、メンバー全員のインスピレーションを投影させながら完成させていったんだよ。

—では、インスピレーションを磨くためにはどうしたらいいでしょう？

MI：やはり、待っているだけじゃ駄目だと思う。自分から探しに行く気持ちは必要だね。その方法はいろいろあると思うけれど、例えば、見知らぬ土地を旅したり、女性を好きになったり(笑)、そういった中から得られるものじゃないかな。

—ところで、今回、急遽決まったプロモーション来日では、インストア・ライブも含め様々な場所で演奏を披露されていましたが、お客さんもかなり盛り上がりが見受けられました。

MI：演奏後、会場の人たちから直接ライブの感想を聞くことができたんだけど、どうやら、皆さん、楽しんでくれたようで本当に嬉しかった。9月18日から26日までという短い滞在とはいえ、日本の良さは充分実感できたよ。例えば円滑な人間関係を築いている国だということも解かったし、その素晴らしさがジャズ・クラブにも反映されていることなど、身を持って感じさせてもらった。ミュージシャンに対する洞察力がとて高い人たちが多いようだね。すでに来日したことのある仲間のミュージシャンたちからこの国の良さを散々耳にしていたけれど、想像以上だった。



インスピレーションを磨くためには 待っているだけではいけない

—2009年3月にレコーディングを行ない、7月にリリースされた日本デビュー盤『インスピレーション』がとて好評で、ジャズ・ファンの間で大注目となっています。

マックス・イオナータ(以下 **MI**)：アルバム『インスピレーション』をレコーディングして本当に良かったと思っている。なんといっても、ここしばらく共演する機会がなかった昔からの友人であり、恩人でもあるファブリツィオ・ボツツ(tp)と再会するチャンスになったし、

それがきっかけで、最近、彼と一緒にコンサートを行ったりもしているんだ。自分としては、今後、『インスピレーション』を第一弾としたシリーズ作品を作れたらいいなと思っている。

—アルバム・タイトルにもなっている“インスピレーション”は、ジャズを演奏する上でとても大切な要素ですよね？

MI：インスピレーションとは“突然の閃き”であり、向こうからやってくるモノだ。例えば、朝目覚めてパッとメロディが浮かぶことがあるけれど、それはまさにインスピレーションのなせる技なんだよね。つまり、作曲するという作業は、建築家やエンジニアのように誰かから依頼を受けて制作する感覚とはまるで違うんだ。今回のアルバムでも、レーベルのアルポーレ・ジャズからももらったアイデア

Max Ionata

イタリア・ジャズ・シーンの注目株

マックス・イオナータが

来日!



Appears on

『ブラック・スピリッツ』
ファブリッツィオ・ボッソ・
ニュー・プロジェクト

ポニーキャニオン (M&I)
MYCJ-30558
■①ナットヴィル ②ブラック・スピリット ③ボテ
イ・アンド・ソウル ④アップ・ジャンプト・スプリ
ング ⑤チュニジアの夜 ⑥ドゥー・ユー・ノウ・ホ
ット・イット・ミーンズ・ミス・ニューオリンズ
⑦パブル・オン ⑧エ・ラ・チアマーノ・エスター
テ ⑨ボッサンド ⑩ティーズ・ブルース ■ファ
ブリッツィオ・ボッソ (tp), マックス・イオナータ
(ts, ss, fl), ルカ・マンヌツァ (p), ニコラ・ム
レーズ (b), ロレンツィオ・トゥッチ (ds), ゲスト:
マルコ・タンブリーニ (tp)



Leader Album

『インスピレーション』
マックス・イオナータ・カルテット
feat. ファブリッツィオ・ボッソ

アルボレ・ジャズ
ALBCD-004
■①トゥー・フレンズ ②サトソング ③シャイニー
ストックINGS ④ファンクワン ⑤ヘイ・ルーキ
ー ⑥ギンザ・ライン ⑦ミ・ディヴェルト ⑧ラヴ
ラヴ・アフア ■マックス・イオナータ (ts), ル
カ・マンヌツァ (p), ニコラ・ムレーズ (b),
ニコラ・アンジェルッチ (ds), ファブリッツィオ・
エジェ・テレスフォロ (vo/on 5)

Profile

1972年、イタリア出身。幼少の頃、地元のマーチン
グ・バンドでサクスを手にする。以来、仕事をしな
がらアマチュアとして楽器を続けてきたが、コンクール
で優勝したことなどをきっかけにプロ・ミュージシャン
になることを決意。2009年7月に日本デビュー・ア
ルバムに『インスピレーション』をリリースした。また、
10月にリリースされたファブリッツィオ・ボッソの新作
『ブラック・スピリッツ』にも参加するなど、現在国内
外で注目されるサクス・プレイヤーのひとつ。
<http://www.maxionata.com/bio.html>

たな。何より食べ物が高レベルに美味しい(笑)。
特にうどんは絶品だね! うどんは、日本の
スパゲッティだ。

—ここ数年、日本では、イタリアのジャズ・
ミュージシャンに対する支持が急速に高まっ
ていますが、その現象はご存知でしたか?

MI: そうらしいね。確かな理由は解からな
いけれど、もしかしたら、ジャズに対する好
みや考え方がイタリア人と日本人は似てい
るのかもしれない。食に関しても共通点を感じ
るし、どうやら僕らの類似点は多いんじ
ゃないだろうか。いずれにせよ、このブームが
一過性のモノではなくて継続することを心か

ら願っているよ。その主役的存在に僕はなり
たいと思っているんだ。

演奏していると、楽器が自分の 一部だと思える瞬間がある

—さて、現在、37歳のマックスさんがサク
スを手にされたのは11歳の時だそうです
ね。

MI: 地元のマーチング・バンドに参加した時
に手渡されたのがきっかけだよ。だからたま
たまなんだ。実際にジャズを演奏し出したの
は16歳の時だったかな。

—初めて自ら買ったレコードは何でしたか?

MI: 確か、ジョン・コルトレン (ts) の『ブルー
トレイン』。といってもあの頃は、あくまで趣
味でサクスを吹いていただけでね。それ
が次第に周囲からプロの道を勧められるよ
うになり、別の仕事をしながらジャズの勉強を
始めたんだ。2000年に“マッシモ・ウルバ
ーニ賞”を受賞してから、本格的にプロのミ
ュージシャン生活をスタートさせたんだけれ
ど、良い匂いがすれば自然と気持ちがその
方向に行ってしまうように、結局のところ僕
は純粋にジャズに魅了され、いつしか自分
の中の情熱が沸き立ってしまったんだと思う。
—子供の頃からジャズが流れているような
環境で育ったのでしょうか?

MI: 逆だよ。僕の家ではジャズどころか音
楽自体がまったく存在していなかったんだ。
正直な話、母は酷い音痴で、父はリズム感
がゼロだからね(笑)。改めて思い返すと、
自ら音楽を求めていたというより、音楽が僕
を追いかけてきたように感じるし、サク
スも僕を欲していた気がするんだ。

—すでに26年間、サクスを吹き続けて
いるマックスさんですが、この楽器のどん
な魅力を感じていますか?

MI: ソニー・ロリンズ (ts) も言っているよ
うに、サクスを演奏していると楽器自体が自
分のカラダの一部だと思える瞬間があるん
だ。実際、トランペットやサクスというの
は、自分の息を使わなければ音は出ないわ
けだし、そういう意味においても人間と同化
させて、初めて“鳴らせる”楽器、それがサ
クスなんだよね。そこが魅力だと感じてい
るし、だからこそ、出した一音一音が自分
の魂の形を代弁するようなモノであってほ
しいと思っている。その結果、永遠に残るよ
うな音でありたいと心掛けながら演奏してい
るんだ。

—確かに、マックスさんの奏でるサウン
ドは、とても温かくて、人間らしい深みを感じ
ました。

MI: ありがとう。最高の誉め言葉だよ。僕
自身、まさにそういう音色で表現したいと思
っているからね。

—では、演奏する上で最も大切にされてい
ることは?

MI: とにかく楽器を愛すること。サクスを



緊急来日ということもあり、郡内ではライブハウスでのライブはなかったが、HMV、タワーレコード、ディスクユニオンなどでのインストア・ライブはどれも大入り。注目の度合いが伺えた(写真は9月19日に、東京・大久保の管楽器専門店“石森管楽器”で行なわれたコンサートの様子)。



BORGANI Ionata's Saxophone

使用している楽器は、現在も工房で1本1本ハンドメイドで作られているというイタリア製の“ボガーニ”。写真はシルヴァー・パールという仕上げのモデルで、ハイF#キーは付いていない。また、マウスピースはイオナータの友人がリフェイスしたものとのごとで、開きはおおよそ11と、かなり広めになっている。リガチャーはフランソワ・ルイを使用。また、来日時に石森音楽器で勧められた同店のオリジナル・ブランド“ウッドストーン”のリードを試したところ、4番をとても気に入り、「ぜひ今後でも使用したい!」と語っていた。なお、ボガーニの日本の輸入代理店も石森音楽器 (<http://www.ishimori-co.com>)。



Max Ionata

愛することに尽きると思う。

——上達するには、もちろん日々の練習も大切ですよ。

MI: その通り、というより、それしかないといっても過言ではないね。僕も以前は、1日、10～12時間ぐらいは練習していた。ただし、好きな音楽を演奏することが大事なんだ。僕も嫌いな音楽は一切演奏しないし、お気に入りの音楽だったらすぐにモノにできるからね。今は長時間練習することは、あまりない。ツアーに出たりしていると、その時間を作るのは物理的に無理だからね。それでもできる限り練習するようにはしている。例えば、息を吹かず、運指の練習をしてみたり、クラシックのフレーズを取り入れるなど、様々な方法でサクソと触れ合うようにしたりね。もちろん、聴くことも大切な勉強のひとつだよ。だから、移動中は他のミュージシャンのCDを聴いていることも多いんだ。——ジャズ以外の音楽も聴くのですか？

MI: ロックは聴かない。僕はロックを耳にしても気持ちが高揚することはないんだ。クラシックは聴くこともある。例えばバッハなどは大好きだ。ジョアン・ジルベルトやアントニオ・カルロス・ジョビンなど、ボサ・ノヴァ

も聴くけれど、僕にすればボサ・ノヴァはジャズの一部だ。もちろん、イタリアを代表する作曲家のエンニオ・モリコーネやピエロ・ウミリアーニなども聴くよ。……そういえば、僕がデビューした頃、ウミリアーニがコンサートに来てくれたことがあるんだ。あの時は本当に驚いたな。きちんとネクタイを着用し、最高にエレガントな装いで会場の最前列で観賞してくれたんだけど、演奏が終わったら、わざわざ僕を訪ねて来てくれて「実に感動的な音楽だったよ!」と大絶賛してくれた。今もその言葉は忘れられないね。

——音楽を続けていく上で励みになるエピソードですね。

MI: そういえば、こんなこともあったな……まだ別の仕事と掛け持ちをしながら音楽活動をしていた頃の話だけど、昼間、仕事を終えてローマのジャズ・クラブに遊びに行ったら、スティーヴ・グロスマン(ts)がプレイしていたんだ。途中、ステージ上から“誰か演奏したい奴はいるか?”と言っていたので、僕は疲れ切っていたけれども、せっかくのチャンスなのですぐに舞台上上がってサクソを吹いたんだよ。そうしたらその瞬間、グロスマンが僕のところにやって来て、いきなり

熱い抱擁をしながら首にキス、キス、キス(笑)。まだ演奏している最中だったし僕も若かったので、かなりびっくりした。でも、あの偉大なるグロスマンから熱烈なハグをされたんだから、もちろん感動したけれどね。

——貴重な場面を拝見したかったです(笑)。さて、10月には、クアルテット・トレヴィイ・フィーチャリング・マックス・イオナータ名義のアルバム『ナイト・ウォーク』も発売されますし、ファブリッツィオ・ボッソの最新作『ブラック・スピリッツ』など、あなたのサウンドが楽しめる機会も増えてきました。今後ますます精力的な活動をされていくことを期待していますが、今の夢は？

MI: プロのミュージシャンとして多くの人々に僕の演奏を聴いて貰うことが夢だったけれど、それが叶った今は、できるだけ長い間ミュージシャン生活を送りたいと願っている。今年8月に78歳で永眠してしまったジャンニ・バッソは、亡くなる直前までサクソを吹き続けていたけれど、僕もそういう生き方をしたいと思っているよ。最期の瞬間まで、衰えることなく最高の状態でプレイし続ける。それが望みだ。 ■